

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月26日現在

機関番号：12201

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22730683

研究課題名（和文） 明治期における小学校社会系特設教科目の実践展開に関する実証的研究

研究課題名（英文） Development of specially-installed subject at the elementary school in the Meiji Era

研究代表者

熊田 禎介（KUMATA TEISUKE）

宇都宮大学・教育学部・准教授

研究者番号：90375519

研究成果の概要（和文）：本研究では、明治期における小学校社会系特設教科目（「雑科」）の展開過程を、長野県内および青森県内における実践事例に即して実証的に明らかにした。各地の学校・図書館に所蔵される史料や地方教育会雑誌の関連記事の調査・分析を通して、第一次小学校令期を中心に、両県において雑科が継続的な実践展開を見せていることが確認された。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research is to make clear the development process of specially-installed subject at elementary school in the Meiji Era. In Nagano and Aomori prefecture, it became clear that practice of specially-installed subject was developing continuously under the first Elementary-School Act.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	100,000	30,000	130,000
年度			
年度			
総計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：明治期、第一次小学校令、特設学科、雑科、尋常科、温習科、地方教育会雑誌

1. 研究開始当初の背景

これまでの調査研究を通して実践の存在を史料上において確認できている長野県・群馬県および青森県を中心にして、各県内における実践事例の調査・発掘に可能な限り努めるとともに、実践の展開過程や相互の関連性について検討する。

2. 研究の目的

本研究は、明治期における小学校社会系教科目（「雑科」）の実践の展開過程を、長野

県内および青森県内における実践事例に即して明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

以上の目的を達成するための手続きとして、本研究では、各地の学校・図書館に所蔵される実践史料および地方教育会雑誌などにおける関連記事の調査・分析を行う。

4. 研究成果

(1) 長野県内における特設教科目（特設学

科)である雑科の実践展開については、少なくとも明治20年代初頭にまで遡り実践の存在を確認することができ、特に、第一次小学校令期に一つのピークを迎えていることが明らかになってきた。

①具体的には、管見の限りにおいて、『信濃教育会雑誌』誌上の雑科に関する記事は、1887(明治20)年9月に掲載されている「小学雑科の教授目」(第12号、同年9月25日)がその嚆矢である。本記事は、群馬県尋常師範学校附属小学校において「実験」された雑科について「尋常科第四年級第五年級」に教授する47項目を「教授者の参考」とするため、『信濃教育会雑誌』誌上に紹介したものと考えられる。なお、その事項・内容は、『上野教育会雑誌』第5号(1887[明治20]年7月31日)において、「附属小学校ニテ教授スル雑科ノ事項」として掲載されたものと同一である。

②以上のような『信濃教育会雑誌』誌上における群馬県師範学校附属小学校の「小学雑科の教授目」の紹介を一つの契機として、1889(明治22)年から1890(同23)年にかけて、尋常科や温習科における実践構想が盛んに提案されていることが明らかになった。

その事例としては、1889(明治22)年2月の信濃教育会北佐久部会「北佐久部会常集会(尋常小学雑科増置案)」(第29号、尋常科・温習科)、同4月の上水内郡「尋常科温習課程の一定」(第31号、温習科)、同11月の下伊那部会「下伊那部会」(第38号、尋常科・温習科)および1890(明治23)年7月の上高井郡「各郡学事状況 上高井郡 小学校職員会」(第46号、尋常科)等の記事に見られる実践構想が挙げられる。

③なかでも、1889(明治22)年2月の信濃教育会北佐久部会による「尋常小学雑科増置案」は、信濃教育会各部会において最も早い段階に提出されたもので、その実践構想が具体化・体系化を見せている点でも注目できるものである。

また、1890(明治23)年にかけての時期には、主に温習科における雑科の実践構想が、盛んに提案・議論されるようになってくる。その代表的な事例が、1889(明治22)年4月の上水内郡における実践構想である(「尋常科温習課程の一定」)。これによれば、「雑課」は「諸法令ノ心得方 電信郵便ニ関スル心得貯金ニ関スル心得 時計及寒暖計并暦ニ関スル心得 蘭佛ノ使用法 其他之ニ類スル日用必須ナル事項」といった内容を授けることとされている。また、ここでは、尋常小学校における温習科の課程を「一定」されるため、「補習スヘキ課程」として尋常科の正規学科

である読方・算術・作文・習字とともに、新たな学科として「雑課」が特設されている事実も注目できる。

(2) 青森県内における特設教科目(特設学科)である雑科の実践展開については、第一次小学校令期中津軽郡および北津軽郡において継続的かつ独自の実践の存在を確認することができた。

①具体的な実践事例としては、中津軽郡和徳尋常小学校において、1886(明治19)年9月、「工夫画学科」・「実物科」・「言語科」の3科目からなる雑科課程が設置されており、同校の実践史料によれば、その後も一定期間、実践が展開を見せていることが明らかになった。この他、同郡内における他小学校においても、雑科の実践構想の存在を確認することができる。

②また、北津軽郡においては、1887(明治20)年9月に、北津軽郡学事会により「日用近接ノ事柄即チ概目ハ衡ノ使用時計寒暖計ノ見方ヨリ衣服ノ取扱方郵便為替方電信ノ掛ケ方ノ心得貯金預ケ方紙ノ斬り方障子ノ張り方変事ノ注意方水撒ノ心得方暦ノ見方等細密ノ事柄ニ至ルマテ」を授ける雑科の実践構想について審議・討論がなされ(「北津軽郡学事会」、『大日本教育会雑誌』第66号、1887[明治20]年10月31日)、それが実際に北津軽郡五所川原尋常小学校における実践として結実している。

③北津軽郡五所川原尋常小学校における実践事例については、1888(明治21)年に「正科教授時間外に」雑科が設置されたことが確認でき(「小学校の手工科」、『東奥日報』第25号、1889[明治22]年2月5日)、その後、「雑科の内へは手工科及び唱歌を加へ生徒の徳性を涵養し思想を高尙ならしめ脳力手指視力の動作を暢発し及び事物処理の順序を会得せしむる等を務とせり」(「五所川原尋常小学校」、『東奥日報』第57号、1889[明治22]年3月15日)とあるように、継続的かつ独自の実践展開を見せている。

(3) 以上のように、本研究を通して、長野県・青森県内において、第一次小学校令期を中心とした雑科の継続的な実践展開を確認できることから、今後は他地域における実践事例の調査研究が必要不可欠となってきた。

また、この後、長野県内では、1895(明治28)・1896(同29)年に松本尋常高等小学校において雑科が設置され、1907(同40)年の雑科廃止にいたるまで断続的に実践の存在が確認できることから、明治期における直観科や郷土科、国民科といった社会系特設教科目に

連なる実践的系譜を探究していくことが、さらに重要な課題として浮かび上がってきた。

なお、以上のような調査研究をふまえた研究成果を出来るだけ早期に公表する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

熊田 禎介，第一次小学校令期における雑科の実践展開とその性格—『信濃教育会雑誌』に見る実践事例を中心にして—，宇都宮大学教育学部紀要，査読無，第62号第1部，2012，105-116

〔図書〕(計1件)

谷川彰英監修，江口勇治・井田仁康・伊藤純郎・唐木清志編著，東京書籍，市民教育への改革，2010，238(110-121)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

熊田 禎介 (TEISUKE KUMATA)

宇都宮大学・教育学部・准教授

研究者番号：90375519

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし